

2019 年度第 2 学期終業式式辞

おはようございます。生徒の皆さんにとって 2 学期はどうでしたか。

今日は、「2 学期を振り返って」そして「三流 二流 一流」の話をします。

9 月、学校ではまず EMK 学校祭が盛大に行われました。文化祭も体育祭も、「百祭錬磨」のテーマにふさわしい穎明館の伝統に鍛え上げられた生徒の皆さん主体の素晴らしい行事になったと思います。文化、カルチャーの語源は「耕す」にあるといいますが、今後も穎明館の学校文化を主役である生徒の皆さんの手でさらに耕して行ってください。

10 月は台風 19 号の影響を受けて大変でした。とくに被害を受けたり、交通事情でしばらく登校できなかつたりした生徒、ご家族には改めてお見舞い申し上げます。自然災害が起こるたびに、自然の猛威という言い方をしますが、人類史・文明史的に見ても、自然とのかかわり方を見直す時期にきているようにも思えます。防災という観点では、「備えあれば憂いなし」とも言います。日頃からの備えをお互いに大事にしていきたいものです。

さて 3 年生、4 年生、5 年生の皆さんは、進学講演会で医学博士、解剖学者の養老孟司先生のお話を聞く機会を得ました。AI 時代、人口減少時代、地震が必ず起こり得る時代等、これからの時代、社会についていろいろと予測しながら、皆さん一人ひとりの感じ方や考え方、向き合い方が大切になってくるという養老先生のご指摘が印象に残りました。皆さんには、古代ギリシャ、ソクラテスの「汝自身を知れ」を今一度、胸に刻んでほしいものです。

11 月から 12 月は三者面談等で、進路を考えながら勉学に励む時期だったと思います。三者面談で担任の先生と約束したことは実行できていますか。結果はまだ出ていないかもしれませんが、小さな一歩でいい。踏み出してみましよう。学校は間違えていいところです。EMK の E は Experience、失敗経験を含めての経験です。失敗から学んでください。皆さんのこれからの期待しています。

また、2 学期を通じて、社会的には明るい、喜ばしいニュースもありました。例えば今年のノーベル化学賞が旭化成の吉野彰・名誉フェローに授与されたことです。「リチウムイオン電池の開発」が受賞理由ですが、私たちのスマートフォンやノートパソコン、電気自動車などに広く使われていますね。吉野さんは受

賞について「若い研究者の励みになる」と述べました。これをまたきっかけに皆さんのような若い世代が挑戦を重ねていくことを期待したいものです。

それからスポーツの分野では、日本で開催されたラグビーワールドカップでの日本代表チームの躍進、活躍です。グループリーグで4連勝し、目標としていた初のベスト8進出を決めました。ちょうど台風19号の被害ニュースが伝わる時期でしたが、リーチマイケル主将の「被災者に少しでも勇気が与えられたら」の言葉通り、ワンチームで日本国民を勇気づける戦いぶりでした。また試合後に敵味方なく健闘をたたえあうノーサイドの精神も印象に残りました。アスリートの活躍、来年の東京オリンピック・パラリンピックも楽しみにしたいものです。

2学期を私なりに振り返りましたが、皆さん一人ひとりそれぞれに印象に残っていることがあるでしょう。この冬休みには2019年、平成から令和への1年という括りでも振り返りつつ、来年2020年、令和2年に向けて皆さんそれぞれが、決意や抱負をもつことも期待したいと思います。

さて今日はもう一つ、「三流 二流 一流」の話をいたします。これはある教育雑誌に下町壽男先生という校長先生が書かれていた随筆で、大変印象に残り、先日の成績会議で先生方にも紹介し、生徒の皆さんにも伝えたいと思ったものです。少し長くなりますが、抜粋して読み上げます。

「以前、バスケットの専門家から三流、二流、一流の選手についてこのような話を聞きました。

三流選手の楽しみは、手を抜く、さぼる、楽をして練習や試合をするというものです。そこには努力をしないで、ただ試合を楽しみましょうという考えがあります。

二流選手の楽しみは、試合の勝ち負けや良いプレイをしたら喜び、悪いプレイなら落ち込むなど、目先の結果や外発的なやる気や報酬から行動するというものです。

一流選手の楽しみは、うまくなること、チャレンジすること、ハードな練習を乗り越えること。そのスポーツが好きで、楽しむこと。自分の目標を決めて達成しようとする事です。自分との闘いができる、自分に打ち勝てる選手、つまり内発的なやる気を持った、自立した選手です。

このような考えは、部活動だけではなく、日々の学習にもよくあてはまること

ではないかと思えます。ここで「選手」を、授業を受ける「生徒」と置き換えて、次のように読み替えてみましょう。

三流生徒の授業姿勢は、手を抜く、さぼる、居眠りをするというものです。そこには努力をしないで、ラクをして授業をやり過ごそうという考えが見られます。つまり彼らの満足は、できるだけ何もしないということです。

二流生徒の授業姿勢は、テストで良い結果が出れば喜び、誰かに成績が負けたといって落ち込むなど、目先の結果や、居残り学習などのペナルティ、叱責などで行動が決定していくというものです。つまり、彼らのやる気は罰則や報酬など外発的要因によって生まれていると考えられます。

一流生徒の授業姿勢は、理解することへの欲求を持つこと、難問にチャレンジすること、そして、その科目の内容を楽しみ、面白い姿勢を持っていることです。わからないことに対してわかりたいという気持ちを持ち、自分に打ち勝つ内発的なやる気を持った主体的な生徒、こんな生徒が成功するので

この記事には次のような続きがあります。

日々の授業を充実させるためには一流の授業姿勢を身につけることが必要です。しかし、それは、生徒の能力や努力を待つのではなく、そのような生徒をつくる授業の構築が問われているのだと思えます。

私は別の号で、先ほどの「三流・二流・一流」の話の続きを以下のようにまとめました。

三流のコーチは、目先の結果や成績にこだわり、成績がままならないと、時に、生徒の前で暴君のように振る舞います。基本的に、生徒の能力を信じていないので、課題やドリルを繰り返したり、練習時間を増やすことで結果を得ようとします。生徒に考えさせず、理屈抜きで自分の手法を押し付けます。

一流のコーチは、そのスポーツの楽しさを教えます。コーチがそのスポーツを愛していることが選手に伝わり、選手もスポーツが好きになります。なぜ、この練習が必要なのか選手にきちんと説明します。そして生徒に自ら考えさせることを大切にします。

一流の授業者は真摯に生徒に向き合い、教えることに情熱を持っています。単に、教科書の問題を淡々とこなすのではなく、深い教材研究に根差した教材観を持って、生徒が明日も勉強したくなる気持ちにさせます。そして、生徒

に考えさせ、発信させる取組みを行います。一流の授業者は、教材も生徒もどちらも大好きな人のことだと思います。

受動的な生徒や、学びに対して後ろ向きの生徒を目の前にして、彼らを何とかしようと思えば思うほど、その思いのベクトルは、教師である自分に向けられていくのかもしれませんが。」

以上、記事抜粋です。

生徒の皆さん、どう思いましたか。まず、皆さん一人ひとり、「三流・二流・一流」の、どの部活動への取り組み方、そして授業姿勢ですか。一流でありたいと思いませんか。

もちろん、我々教師も一流でありたいと思っています。私は今回、この随筆に触れ、先生方に紹介する際に、アメリカの教育者ウィリアム・アーサー・ワードの言葉を思い出していました。

「凡庸な教師はただしゃべる。よい教師は理解させようと務める。優れた教師は自らやってみせる。偉大な教師は心に火を点ける。」

生徒の皆さんの心に火を点ける、一流の教師になりたい、と改めて思います。穎明館では生徒も先生方も一流でありたい、一流を目指そうではありませんか。今日は「2学期を振り返って」そして「三流 二流 一流」の話を致しました。

短い冬休みですが、家族や親せきの皆さんなどと楽しく過ごす時間も増えるように思います。リラックスしながら、家族の一員としてお手伝いなど、進んでやるべきことをやってほしいところです。

6年生の皆さん、いよいよ追い込み、正念場を迎えますね。現役生は入試当日まで伸びる。自分を信じて「焦らず、恐れず、怠らず」、目標実現に向けて努力を続けてください。先生方、仲間、後輩の皆さんが応援しています。

皆さんが健康で、希望にあふれた新年を迎えることを期待しています。

以上、令和元年度2学期終業式の式辞といたします。